

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	信ずる所を明にす : 雑録
Author(s)	大野, 禧一
Citation	龍南會雜誌, 38 : 24 - 28
Issue date	1895-06-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4604
Right	

りければ、善助、固く辭いなみ奉りて、是れ臣を以て君に敵す、と申す事に候へば、いかに仰せらるとも、この命のみは、奉じかたし、と申上けられども、許し給はす、然らば、是非に及び候はず、とて、俱に場ついでに上る、公槍を擧げて、善助に當り給ひければ、善助木刀を持ちてこれを支へ、跳り入つて、公の兩臂を連打に打ち奉り、すなはち頓首して、御臂は痛みも候はざりしかと申上けられば、いや／＼、此の如くならでは、技を較ぶとも、益なし、よし／＼、との給ふ、その事に臨みて、英姿奮發、武將の風あること、此のごとし、善助は、世々劍術の師範を務めし者、既に終りて後、公の槍法は、よのつねにれはします、としば／＼物語りけるとぞ、

(未完)

信 ぜ る 所 と 明 に す

大 野 禪 一

馬關條約一たび成て、漢山の風雲未だ收らず、密雲疊々、雨ふらんと欲て未だ雨ふらず、赤電時に雲間に閃きて、未だ殷々轟々の聲を聞かず、是正に時窮せんとて、英才を思ふの時、我國育英の任に當り、將た人物を以て世を匡濟せんと欲するもの、人材の多うらんを願ふの秋なり、是時に當り常時懷抱する所を明にして以て其人に質す、豈益なからんや。

歐大陸の西北岸頭に位し、ビスケイの灣荒波激濤天を排する處、灣流の洗ふ處、環海千里、纜を繋ぐべきの港、碇を投すべきの灣、沿岸に出入し、萬國の船舶此に輻湊し、萬國の商賈此に集る、其市邑の多き二千有余、其の倉庫の夥しき普く天下の物産を堆積す、其市街の肩摩轂擊晝夜車馬囂々たる、其製造業の繁盛なる、陸には百萬の貔貅を列ね、海には數千の艨艟鐵艦を浮ぶ、其勢宇内を包擧し、其威一

世を睥睨す、嗚呼、これ英國現今の光景にあらずや。然れども、茫々千有余年の昔、該撒が旗を立て、ドゥバーの白壁を眺めたる時、カエー卜架を横へて底莫斯を遡れる時、何ぞ此の蠢々たる蠻族が、此の藁爾たる一小嶋國より起り、かくも一世に雄視するに至らんとを思はんや。大西大平兩洋の間に位し、廣袤萬里、平原茫々ミスシッピーの河滔々として其中央を流駛し、ミッソリー、ヲハイヲ、ブラット、アルカンサスの諸大支流其間に屈折蜿蜒流す、土壤平坦、地味豐饒、到る處豐耕牧畜の沃野に富み、鑛山には金銀銅鉄充溢す、人民は新立國の勢を驅りて完全新美の政体を設け、殷富を以て傲然宇内を睥睨す、嗚呼これ北米合衆國の狀態にあらずや。然れども、今を去ること四百余年の昔、コロンブスが二三の小艦を率ゐて此の土に着し、初めて裸体跣足の蠻族を見たる時、何ぞ後來この矮屋が大厦高樓となり、この部落が世界屈指の市場となり、この蠻土が世界の黃金國たるを知らんや。然れども、更に怪むことを須ひず、是國家發達の大勢なれば也。然るを若し當時野蠻なるの故を以て、兩國後來決して富強文明の國たるを得ずと云ふものあらば、誰か其愚を笑はざらん。

夫、人は學修交際の二つにより、其智識を進め、識徳を高くし、勉めて止まずんば、以て賢に至り聖に至らんこと、猶一國が學術の進歩と交通貿易とによりて、國民の智識を進め、富強の度を高くし、萬國に雄視するに至るがごとし。獨怪む世人は、何が故に、野蠻國が後來一強國となることを認めて、一旦愚鈍なるものゝ、後來大器となるの期あることを許さざるや。何が故に、衰微せる一強國が後來尙ほ勃興の運あるを認めて、一朝身に瑕瑾あるものゝ、後來金玉たるを得るの期あることを許さざるや。けだし人の資質清濁粹駁の差あること、猶土地に豐饒瘠瘠の別あるがごとしと雖ども、其一點靈妙の精神所謂明德なるものに至りては則一なり。其修養如何によりて、聖に至り賢に至らんこと、猶國民

の勵精如何によりて、國家の隆盛を來すことを得るがごとし。然るに、今日愚鈍の故を以て、他日聖賢たることを得ずと云は、是千余年前の英國を指して、後來強國たることを得ずと云ひ、四百余年前の米國を指して、到底黃金國たることを得ずと云ふに何ぞ異ならん。

夫、人尊ぶ所のものは、資質にあらずして精神にあり、勉學にあらずして立志にあり。靈妙なる心性、氣稟物欲の之を蔽ふことを患へず、之れを掃ふの精神なきを患ふ。混濁の資質、徒らに勉學するなきを患へず、偉大なる目的に向て此を達せんと希ふ一念劈頭の決心なきを患ふ。偉人傑士の業壯大を極むと雖ども、其因る所は丈夫一念の閃動に在るのみ。蘇長公曰。

人固有暴猛獸、而不操兵、而出入於白刃之中、而色不變者、有見虺蜴而却走、聞鐘鼓之聲、而戰慄者、是勇怯之不齊至於此、然閭閻之小民、爭鬪戲笑卒然之間、而或至於殺人、當其發也、其心翻然其色勃然、若不可以已者、雖天下之勇夫、無以過之。

閭閻之小民勇怯尙且然、況んや學を講じ道を修むるもの、濟世の念胸中に勃發し、翻然たる其心は變じて、確乎たる安心立命の念となり、勃然たる其色は、勇往直進の氣となるものに於てをや、之を要するに、心志の舵一轉にあるなり。其惟一轉なり、以て賢たるべし、以て愚たるべし。まかしてその賢たると、愚たるとは、之れを導くもの、如何と、其人自身の修養如何にあるなり。維新の原動力は一の松下村塾にあり。松蔭嘗て其子弟に告げて曰く。村塾小なりと雖ども、願くば天下の骨髓とならん。而して其後、維新の大業を起企せるものは。果して當時村塾の少年なり。感化の及ばず所夫此くの如し。然るに、世人動もすれば、人才の求むべきを知りて、之れを養成することを知らず、人才の希なるを嘆じて、振作を圖らず、資質を信じて、修養を重せず、徒らに奇才の名に眩して、空しく後來英傑たるべ

き人をして、廢物たらしむ。是後來英傑一人を滅するにあらずして何ぞ、奪ひ去るにあらずして何ぞ。英傑は國家の盛衰に關するもの、若し夫國家を衰へしむるものを指して、忠ならずと爲すことを得ば、此の人を呼て忠ならずと云ふ、又何の不可か之あらん。若し國家の隆盛を願はざるものを指して、愛國の情なしと爲すことを得ば、此人を指して、愛國の情なしと云ふ、又何の不可か之あらん。范仲淹は廟堂の高きに居ても憂ひ、江湖の卑きに居ても、又憂ふ。余を以て之を見るに、假令資資混濁なるものも、以て國家の材たらしめんと欲する、熱情ある人こそ、眞に國を愛するものと云ふべく、國に忠なるものと云ふべし。徒らに放棄する、之れ道にあらざるなり。嗚呼、今、世に育英の任にあるもの、應に松蔭の至誠と抱負とを以て、子弟の率先者となり、模範となり、之を誘導え、鼓吹し、滅奪の罪を畏れ、敬天の心、以て大に國家に盡さるべけんや。若し此の如くならずして、以て人材の輩出せんことを望む、是木によりて魚をもとむるなり、願ふと雖ども得べけんや。

然ども、古人其の人を責むるや薄く、其の已れを責むるや厚し。世の少年子弟、學を講じ身を修むるものに至ては、之に依賴し、安閑悠々を送るべきにあらざるなり。古へ豪傑の士は、文王なしと雖ども猶興る、當に以て奮發努力すべきなり。世を舉げて癡となすとも、斷乎として顧みることなかれ。自棄之身を謬るものと、須らく以て志を大ならしむべし。天の人を生ず豈に徒らに生ずるならんや、應に以て爲さしむる職分あるなり。身を憂ひ世を憂ふるは、是確ろに思想一段の識を加へたるの時、此時に乗じて翻然以て賢者の群に入り言行を謹み威儀を正し、以て一世の模範となり、世を濟ひ國を救ふの志を立つべきなり。此の志を立つる徒らに立つるにあらず、天に順ふなり。如此にして、以て國家の富強待つべく、文明期すべし。

然るを、今徒らに小成に安んじ、偷安姑息に流れ、一身を放棄して、以て身をあやまるもの、滔々皆是也。以て責に教にあるものをして、天下才なしの嘆を發せしむ、慨すべきの至ならずや。然ども、之尙忍ぶべし、身を憂ひ世を憂ふの念胸中に閃動するもの、已に克つの勇氣なく、區々たる事物に誘惑され、遂に無用の俗物に終り、或は中道に元氣を損じて、其天真本然を失し、碌々終るに至ては、之れ果して何の心ぞや。夫一國の消長盛衰は、國民中少數なる人物の向背如何にあり、而して今此少數人物を失ふ、將た何を以てか、此の世を濟せん。是余が區々の心を以て、信ずる所を明にする所以なり。

嗚呼、堂々六尺の大男兒、苟も志なくんば則止む。志あらば、又何のならざることあらんや。爲すもの常に成り、行くもの常に到る、當に發憤努力すべきなり。若夫一たび憂國濟世の念中に動かば、宜しく確乎たる道念と、堅猛なる意志とを把持し、英往直進の氣を養ひ、以て利世安民の業を起企すべきなり。如此は當に我人が盡すべき職分にあらずや。

今や長白山邊黑雲漸く大に、活動の勢萃る所、靈變の機伏する所、迅雷一閃百雷轟き、猛虎一嘯百獸震ふ、活劇の期、將に遠からざらんとす。朝野を擧げて、驚天動地の大才を待つ、聲漸く盛に、英雄一たび去て復かへらず。壓倒海南三尺劍、蹂躪天下七寸鞋、その詩長へに残りて、又其人なし。天の未だ淫雨せざるに當りて、牖戸を稠繆す、法に文に農に工に商に吾人この覺悟あるや否や。

武士訓を讀む

十八萬空遊士

日清戰爭起りてより、武士道といふと世の人の口に上ること漸く多くなりたるやうなり。龍南會雜